

連載 立教学院諸聖徒礼拝堂聖別 100 周年

諸聖徒礼拝堂から読み解く、立教大学 100 年の歩み (2)

立教大学文学部キリスト教学科教授 加藤 磨珠枝

前号では、立教学院諸聖徒礼拝堂が今日にいたるまでの歴史の変遷をたどりました。本号では、その建築と内装のデザインを取り上げます。過去の資料を紐解いて見ると、その決定には紆余曲折があったことがわかります。

チャペルのめざした建築

池袋キャンパス構想は、アメリカ聖公会から派遣されたマーフィー&ダナ設計事務所に委託されたことを前号で述べましたが、彼らが 1915 年に制作したチャペル内部の構想スケッチ (図 1) を見ると、現在の意匠との違いが認められます。

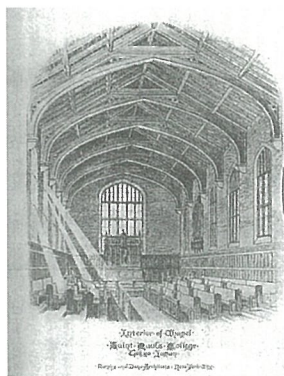


図 1 マーフィー&ダナ建築事務所による「諸聖徒礼拝堂内部の構想スケッチ」1915 年 (THE SPIRIT OF MISSIONS 1916 年 2 月号より)

構想スケッチでは、正面奥の内陣に至る狭い通路の両側に 5 列の長椅子がお互いに向かい合い、会衆が対面するように座席が配置されていました。この形式は、オックスフォード大学マートン・カレッジのような伝統的カレッジのチャペル建築を踏襲したものです (図 2)。そこでは前列席に下級生、後列に上級生、そして入口近くに教員が着席し、学校ならではの席順まで定められていました。



図 2 オックスフォード大学マートン・カレッジのチャペル東壁 (13-14 世紀、内部装飾は 1849-51 年に改装)

ところが、立教のチャペルでは、会衆席は対面ではなく、祭壇に向かう形で平行に並べられています。これは、一般の教区教会の座席配列にならうもので、私たちのチャペルが単に学生と教職員だけのものではなく、一般信徒にも開かれた宣教の拠点として、社会での役割を重視した選択であったと考えられます。

この他にも、もう一つ、興味深い資料が残されています。1916 年 2 月刊のアメリカ聖公会伝道機関誌『スピリット・オブ・ミッションズ』の「伝道に相応しい建築」と題された記事です。そこでは、教会の理想を伝えるのに適した建築美について論じられた後、日本の立教学院による伝道の状況、さらに池袋キャンパス新校舎の具体案 (教室、図書館、チャペル、寄宿舎棟、総理公邸、教授宿舎棟) と、その建築様式がどのように決定されたのかという経緯が記されています。

実は、池袋キャンパスの建物には、当初「和風建築」が提案されましたが、日本聖公会側がそれを断固として拒否し、イギリスのオックスフォードやケンブリッジ大学、アメリカのプリンストンやイエール大学などで当時

ヴァイヴァルしていた「ゴシック様式」が、古き良きカレッジの伝統を受け継ぐ立教大学の建築様式として、最もふさわしいと判断され、変更された経緯が記されています。もし、この時に反対意見がでなければ、池袋のチャペルも日本聖公会の奈良基督教会（図3）のような和風建築になっていたかもしれません。



図3 日本聖公会奈良基督教会(1930(昭和5)年献堂)

ゴシック様式のになうもの

こうしてチャペルをはじめ、池袋の校舎群には、ゴシック様式が採用されました。この建築様式は元来、12世紀初めの中世ヨーロッパで誕生したもので、神への信仰と理性によって世界の秩序を理解する、当時のスコラ哲学（ラテン語で「scholasticus 学校に属するもの」に由来する言葉）を象徴する芸術です（図4）。

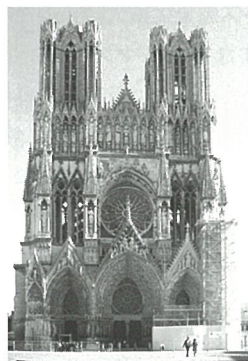


図4 ゴシック様式の教会堂の代表作として
ランス、ノートルダム聖堂、西壁（13世紀末）

チャペルの白い祭壇飾りは、その特徴をもっとも顕著に示しています（図5）。ピナクルと呼ばれる先の尖った塔のような飾り

に、背の高い尖頭形アーチ列、その上部には、トレーサリーと呼ばれる曲線的な飾り格子がはめ込まれています。さらに前号で示した戦前のチャペル写真では、聖域を区切る内陣仕切りも同様の様式で飾られていました。



図5 立教学院諸聖徒礼拝堂 祭壇飾り

ただし、これは中世オリジナルからの模倣ではなく「ゴシック・リヴァイヴァル」と称される18世紀後半のイギリス近代社会で流行した復古主義に由来します。この潮流は19世紀、英国聖公会の「オックスフォード運動」と共鳴し、宗教改革以前のカトリック的伝統を重んずる信仰とその芸術を普及させる原動力ともなりました。この中世キリスト教的デザインが、北ヨーロッパやアメリカへ普及し、アメリカ聖公会経由で日本にもたらされた結果、立教のチャペルは誕生したのです。ここには、教会の理想と学びを伝える神聖な美しさが体現されています。

一方、戦前の豪華な内陣仕切りは、現在まで復元にいたっていませんが、この古風な飾りがなくなったおかげ？で、形式を重んじるハイチャーチから距離を置き、より信徒に開かれた聖堂空間に進化をとげたようにも見えます。

チャペル内にはもう一つ、ゴシック様式の「鷲の姿の聖書台」もありますが、これは、1953年、イギリスの現女王エリザベス2世の戴冠式に日本聖公会代表として派遣された本学の故小川徳治教授が持ち帰ったものです。この聖書台にまつわる感動のお話は、立教大学HP上「キリスト教とチャペル」コー



ナーで五十嵐正司チャプレン長が解説くださっているのです、是非、ご覧ください。

最後に、2020年1月に開催されたチャペル聖別100周年記念行事の後日談を少々。皆様ご存じのように、この記念日をお祝いした後、世界を震撼させている新型コロナ禍の影響が拡大し、3月1日以降、チャペルも感染症対応として公禱の礼拝休止（9月6日に条件付きで再開）、キャンパス閉鎖に追い込まれました。

これは、戦争時以来の悲しい出来事でしたが、その克服にむけて、チャペルではチャプレンたちによるオンライン・メッセージ配信が新たな試みとして始められました。ピンチをチャンスに変える！この伝統と革新の精神で、チャペルはこれからも皆様に寄り添ってくださることでしょう。

[2020年1月21日開催RUM(Rikkyo University Mission) チャペル講演会より]